The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	内面への眼差し : フリオ・ラモン・リベイロ『挫折の誘惑・第1巻』をめぐって
Author(s)	松本, 健二
Citation	Estudios Hispánicos. 2010, 34, p. 43-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97996
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

内面への眼差し
ーフリオ・ラモン・リベイロ『挫折の誘惑・第1巻』をめぐってー

松　本　健　二

＜1957. ago. 3：実際ーほとんど確信に近いのだがー、いつか重要な本を書くとすれば、それは思い出の、追憶の本になるだろう。その本は、僕の人生の断片のみならず、僕の文体とあらゆる文学的不能の断片で構成されることになるだろう。記憶の本とはー小説よりもずっと大規模なー正真正銘のごみためである。そこには、逸話、抽象的考察、事実に関する注釈、性格分析等、あらゆるものが詰まっている。さらにそれは構成の問題とは無縁の本である。[Ribeyro 1992: 171][1]＞

1．はじめに

ペルーの作家フリオ・ラモン・リベイロ（Julio Ramón Ribeyro, 1929-93）は短編が得意な小説家として知られているが、1990年代に日記集と書簡集とインタビュー集が刊行されてからは、身辺些事を自由に綴った雑文にも注目が集まっている。全般に、ラテンアメリカ文学においては、作家自身の私生活を対象にした小説というものをあまり見ない。売れない作家はラテンアメリカにおいても相当に屈折した人生を送っているはずであり、彼らの生活自体が文学ネタの宝庫であると思うのだが、作者自身の私的な生と面と向き合うような作風には乏しいように思われる。また、自伝的な本はあっても、日記を生前に刊行するという例は極めて稀である。たとえば近代日本文学では、作者自身の内面に拘泥する傾向が顕著で（ラテンアメリカ小説では外部世界をどう記述するかが中心的課題である）、私小説なるジャンルまで生まれ（ラテンアメリカ文学にそのようなジャンルはない）、破滅型の作家は今も定期的に現れる（ラテンアメリカの作家は概して健康的な常識人のようである）。筆者はそのような湿度の高い近代日本文学に馴染んできたので、上述したようなラテンアメリカ文学の特徴を常々不思議に思っていた。

リベイロは死の一年前に『挫折の誘惑』（*La tentación del fracaso.*）と題

1　本文中におけるリベイロの日記からの引用は、以下すべて括弧冒頭に日記の書かれた日付のみを記すこととする。引用元はすべて Ribeyro 1992 で、日本語訳は他の引用も含めてすべて松本による。

する日記集を刊行した。リベイロ自身による序文［Ribeyro 1992: 9-10］によると、彼は14～5歳のころから日記を読むのが好きになり、作家や芸術家の日記をコレクションするかたわら20代前半から自分でも日記を書き始め、やがてそれは小説執筆と絡み合って、彼の文学活動の一翼を担う重要かつ不可欠の行為となるに至ったと述べている。また、同じ序文で、英独仏では立派に文学として成立している日記というジャンルが、スペイン語圏ではきわめて冷遇されているという点も指摘している。

本稿で扱う第１巻に含まれている日記は1950年にさかのぼる。1950年代といえばリベイロが実質的な作家デビューを果たした時期である。最晩年、創作初期と重なる時期に書かれた日記集を刊行したからには、その日記も含めた自らの創作の全体像を改めて世に問うたとみなしてよいだろう。第１巻は1950年から60年までに書かれた日記を含む。続く第２巻は1974年までを、最後の第３巻は1978年までを含む。本稿で扱う第１巻と重なる1950～60年に書かれた小説は初期２冊の短編集『羽のないハゲワシたち』（*Los gallinazos sin plumas*. 1955）『様々な状況の物語』（*Cuentos de circunstancias*. 1958）に含まれた全作品、次の２短編集『ボトルと男たち』（*Las botellas y los hombres*. 1964）『三つの蜂起の物語』（*Tres historias sublevantes*. 1964）のうちのいくつか、そして初長編小説『サン・ガブリエル録』（*Crónica de San Gabriel*. 1960）である。

本稿は、日記集刊行前後の先行研究の動向や、1950年代のリマの文学事情などを踏まえた上で、リベイロが日記集第１巻で intimidad という語を頻繁に用いるようになって行くまでの過程を検証し、ラテンアメリカ文学では極めて特異とも言える彼の私小説作家的な一面に光を当てることを目的とする。

２．先行言説の傾向

リベイロ作品を対象とした専門研究については、単行本刊行時の書評、同国人作家や批評家による雑誌等での言及、米国での数点の博士論文などを除けば、1990年代に至るまでめぼしい成果がほとんどない［Higgins 1991: 175-176］。その例外が Luchting 1988である。著者は1955年リベイロがミュンヘン滞在時以来の個人的知り合いで、60年代にはリベイロのエージェントとしての実務もこなしていたそうだ［Gras 2005: 89］。同書は３つの長編小説と長めの短編小説に関する論評で、手堅いが特筆すべき知見はない。

リベイロは、1950年代、急速な近代化とそれに伴う山岳部からの大量移民

によって激変しつつあった首都リマを舞台とする小説を書いていた。それ故、リマの近代化で発生した様々な社会の歪みを作品中に読み取る試みもなされている。その嚆矢は Higgins 1991 である。全短編を丹念に読み込んだうえでの分析が展開されており、それなりに意義深い論考ではあるが、作品からうかがえるユーモアや自虐癖をも作家の意図的戦略とみなして疑わない四角四面の論調が、やや気にはなる。

リマを対象とする文学的都市論においてリベイロの作品を取り上げているのが Elmore 1993 と Valero Juan 2003 である。この両者はそれぞれリベイロ作品に関する単著 Elmore 2002 と Valero Juan 2003-b も著わしていて、共に読み応えのある研究書ではあるが、本稿で扱っている問題とは直接関係がないので評価は割愛する。

1992年から95年にかけて全３巻の日記集が、また96年から98にかけて全２巻の書簡集が、98年にインタビュー集が相次いで刊行されると、リベイロに関する論評は小説から私的文書へとその対象を変えてゆく。92年の日記第１巻刊行の直後、リマの日刊紙『コメルシオ』にコラムをもっていたカトリック大のリカルド・ゴンサレス・ビヒールが早速「自伝的リベイロ」と題する文章を書いていて、そのなかで彼は、たしかに日記も面白いが、一ファンの心情としては、むしろ短編小説家としてのリベイロを応援したい、という趣旨のことを述べている［González Vigil 1996: 306］。日記も踏まえた本格的なリベイロ論の嚆矢は Zorrilla 1998 である。主として渡欧後の日記に基づいて、リベイロの目指したストイックな文体的完成を craft という語で定義し、結局その達成がいっこうにかなわないことの自覚と、逆に、その永続的な未完成自体を嘲笑する自虐体質がリベイロの日記に見出されることに着目し、最後に、次のように結論している。＜彼は、文学が現実を洞察するのに不可欠な道具ではなく単なるお飾りに過ぎない国に生まれたという罪を、そして、五百年にも及ぶ文体上の重荷を引きずる言語を受け継ぎ、ついにその重荷を振り払うことができなかったという罪の報いを受けたのだ。その小説を通し、フリオ・ラモンは彼の愛するチェーホフに並んだとは言えない。おそらくサリンジャーにも、フィッツジェラルドにも、ナボコフにも、要するに彼がその感性から長いこと肩を並べたいと願ってきた作家たちに遠く及ばない。だが彼は、虚構の荒波に浮かぶ多くの作家たちの苦悩と希望に光を灯すその日記や書簡を通し、あらゆる作家が永遠に胸の内に抱く個人的霊廟に留まり続けることだろう。［Zorrilla 1998: 43］＞実は、リベイロを、ボルヘ

スやコルタサルと並ぶラテンアメリカの代表的短編作家とする見方があり、そのいっぽうで、むしろ19世紀後半のヨーロッパの作家、たとえばモーパッサンやチェーホフあたりの旧い文体に留まり続けた作家なのだとする見方がある。前者のような比較をする根拠が筆者には理解できないが（まさかボルヘスやコルタサルに匹敵するはずがなかろう)、後者の見解には賛同する。後者の見解の例としては、たとえば、＜リベイロには厳格な審美的モラルがあり、その模範となっているのは20世紀の作家ではない。スタンダール、モーパッサン、フロベール、チェーホフである。[Oviedo 1998: 255]＞や、＜リベイロは同時代の作家たちの新たな文体的挑戦も気にかけてはいるが、自らは新たな形式の模索はせず、むしろ文学史における一定の叙述方法の継続性を常に強調している。たとえば彼は、ペトロニウス、ケベード、バンジャマン・コンスタン、カミュという作家たちの間を、その書いているテーマこそ異なると認めながらも、ある一本の線で結べると述べている。[Velázquez Castro 2002: 174]＞などが挙げられる。Zorrilla 1998 は日記の分析を通してこうした見解を補強した。

同じく日記を対象にしているのが Gras 2005 である。ブームの作家たちに関する研究の一環として書かれたこの論考は、リベイロが同時代のメジャー作家たちについていかに卑屈な記述をしてきたかを中心に分析し、時には痛罵、時には単純な憧れなどが複雑に混在する、リベイロの情けないダメ作家ぶりを、改めて浮き彫りにしている。ブームとの関係を論じなければならないという制約から、もっぱら文学的挫折にのみ特化した分析となっている点が唯一惜しい点ではある。

リベイロ作品における空間という問題に焦点を絞った Navascués 2003 は、リベイロの求めた安住の地がリマの近い過去にあることを論じているが、これはなにも詳細な作品分析などせずとも、昔からよく言われているごく当たり前の話である。＜リベイロには、スペイン主義者の風俗描写小説に見られる甘美な郷愁もなく、もちろんホセ・マリア・アルゲーダスの魔術的地理感覚もない。逆に、リベイロにとっての楽園的世界とは、同時代の読者にとっては時間的にも空間的にもより身近な、馴染みのあるリマに限定されている。リベイロのアルカディアとは個人的領域であり、これはその当時ペルー文学では切り拓かれていなかった領域であった。[Navascués 2003: 112]＞

以上のことから、主として1990年代の日記集の刊行を機に、より多様なリベイロ論が現れつつある現状がうかがえよう。いっぽうで、リベイロが日記

を書くという行為を自らの文学的活動の中心に据えるようになった動機について、もう一歩踏み込んだ説得力のある論考が現れていないように思われる。

3．渡欧前のリベイロの周囲：50年世代と特殊な家庭環境

リベイロは1952年に渡欧、その後マドリードやパリやアントワープやドイツの諸都市を転々とし、1958年にリマへ戻る。その1950年代に書かれた日記を読むに当たって、渡欧以前のリマで彼を取り巻いていた諸状況を振り返っておきたい。まず、リベイロはペルー文学における50年世代（la generación de 50）に属すると言われるが、この表現には落とし穴がある。

1940年代後半に始まるリマの急速な膨張は、ペルーの全土的な問題が首都圏に集約して観測される状況を作り出し、1950年代に入ると、小説家に限らず多くの知識人がリマ市を著述の対象として選択することとなった。1960年代に書かれた二つの名著、マリオ・バルガス・ジョサ（Mario Vargas Llosa 1936-）の小説『都会と犬ども』（*La ciudad y los perros*. 1962）とセバスティアン・サラサール・ボンディ（Sebastián Salazar Bondy 1924-65）のエッセイ『恐るべきリマ』（*Lima la horrible*. 1964）は、いわばその集大成と言える。リベイロをはじめとする50年世代の特徴としては、都市の下層階級を描写対象に選択したことと、サルトルを思想上の範とする社会改良志向が挙げられる。だが、50年世代の小説家たちは集団的マニフェストを出したわけでもないし、互いに密接な交流があったわけでもなく、単にこの時期のリマの出版社が都市問題を扱った作品を好んで刊行したというのが実態である。しばしばこの世代の小説家の代表と目されるエンリケ・コングラインス・マルティン（Enrique Congrains Martín 1932-）に至っては、代表作『リマ零時』（*Lima, hora cero*. 1954）『ひとつではなく多くの死』（*No una sino muchas muertes*. 1958）という、あまり褒められた出来とは言えない２作品を出した後は、作家活動自体をやめてしまった。もともと文学向きじゃなかったのだろう。リベイロも『リマ零時』には辛辣である。＜1956. feb. 19：本書は誰が見ても政治パンフの様相を呈している。（中略）さらに、演説や嘆き節に充ち溢れた宣伝文書である。メロドラマだ。センスに欠ける。繰り返しと、意味のないこじつけの場面が多過ぎる。これらの欠点にも関わらず『リマ零時』は広く読まれている。コングラインスには読者がいるのだ。彼はその読者を獲得する術を知っていたわけだ。＞この他にも数人の小説家がいるが、後に現れるバルガス・ジョサが偉大すぎたこともあり、この50年世代と呼ば

れる小説家たちは存在感が希薄である[2]。

50年世代の真の担い手は詩人であった。<ペルーでは50年世代と言えば、都市文学の発見と、現代的なテーマ設定と、ある種の左翼的傾向と結びつけて考えられる。そうした定義は不正確とは言えないが不完全である。なぜならばその構成メンバーは—あるいはその大半は—、自分を取り巻く環境のはるか彼方を目指し、若いころからかなりの美学的成熟のうちに身を置くことを望んだ、洗練された芸術家たちであったからだ。[Oviedo 2001: 213]>とあるように、高踏的な詩人集団が1945年以降に文芸雑誌の発刊等を通じて意気投合したというのが、ペルーの50年世代のそもそもの始まりなのである。ルイス・アルベルト・サンチェスは文学史でその経緯に触れているが、それによると1930年代から40年代にかけて、スペイン内戦の余波からペルーでも抗議型の詩が急増し、そうした面白くない詩への反動から、40年代には逆に前衛的な詩を目指す詩人が増えたという。これについてサンチェスは<セサル・バジェホ（César Vallejo 1892-1938）は1938年に肉体的な死を迎えて文学的には蘇った［Sánchez 1989: 2117]>と、面白いことを言っている。要するに、50年世代とは、バジェホの路線を継承するような前衛詩人たちがリードした詩の運動だったのだ。その代表はホルヘ・エドアルド・エイエルソン（Jorge Eduardo Eielson 1921-）、ハビエル・ソログーレン（Javier Sologuren 1921-）、ワシントン・デルガド（Washington Delgado 1928-）、左翼傾向の強い詩人としてはアレハンドロ・ロムアルド（Alejandro Romualdo 1926-）とフアン・ゴンサロ・ロセ（Juan Gonzalo Rose, 1928-83）、もっとも前衛的な詩人としてカルロス・ヘルマン・ベジ（Carlos Gelmán Belli 1927-）がいて、さらにグループの真打ち的存在として、マルチな才能を発揮し若干41歳で早世したセバスティアン・サラサール・ボンディという大スターがいた。また1930年代にシュルレアリスム詩のグループを立ち上げていたエミリオ・アドルフォ・ウェストファーレン（Emilio Adolfo Westphalen 1911-）も元気で、

2　アベラルド・オケンドは、小説の形式をめぐって積み重ねられてきた50年世代の努力が、バルガス・ジョサの『都会と犬たち』の出現によってすっかり吹き飛んでしまった様子を次のように述べている。<つまり、数人の作家たちが小説作法をめぐって御高節を垂れ、狭い業界で影響力を行使している間に、新しい一人の作家があらわれて、その小説一冊をもって、当時のほぼすべてのペルー小説を19世紀の彼方に追いやってしまったというわけです。当時、おそらく多くの作家たちが、自分たちの試みていた実験的手法のひどさを自覚して密かに赤面していたことでしょう。彼らは、バルガス・ジョサというこの偉大な小説の達人の予期せぬ出現に、その最初の小説を読んだ瞬間から、思考停止に陥ったのです。[AA.VV. 1982: 37]>

1947年には *Las moradas* という題の詩を中心とする文芸誌を刊行している。花形詩人が朗読をするカフェには、若き日のリベイロも顔を出していた。1952年8月14日の日記によると、リマのあるカフェでサラサール・ボンディを主賓とする朗読会があり、リベイロも含む若手の小説家たちが自作を朗読する機会が与えられている。文面からは、詩人が文壇の花形であった当時の状況がうかがえる［Ribeyro 1992: 26-27］。たとえば、上述したデルガドは、自らが属していた50年世代の詩人に触れて次のように述べている。＜全体において、この世代の詩人たちはエグレン[3]とペルー・アヴァンギャルド[4]の教えに従い、さらにそれを、同時代ヨーロッパのもっとも洗練された詩人たち（リルケ、エズラ・パウンド、エリオット、サン・ジョン・ペレス、シュルレアリスム詩人全般）の作品を読むことを通して際立たせ、濃密かつ緻密な文学作品を構築した。［Delgado 1984: 149］＞

とは言え、エイエルソンは1950年に渡欧、ソログーレンも渡欧し翻訳活動や大学での教育研究に忙しく、ベジもヨーロッパでの滞在が長く（リベイロの日記にも登場する）、サラサール・ボンディは1947～52年はブエノスアイレスで、その後1950年代の数年間をパリで過ごすなど、これらの前衛詩人たちは1950年代にはリマに定着していない。実際、同じ時代にリマでもっとも目立っていた詩人とは、デルガドやロムアルドなど左翼系の人々であった。この背景には1948年に始まったオドリア軍事政権の存在があり、それら左翼系詩人たちの政治的パフォーマンスは当時の学生運動と密接な関係があった。50年世代の勃興期である1945～48年のリマでは政治的にも文化的にもリベラルなムードが濃厚で、上述したように、この時期のペルー文学は純粋詩を中心としたブッキッシュな傾向が強かったのだが、48年のクーデターを境に状況は一変する。デルガドはその経緯に触れている。＜…1948年の独裁政権樹立後、イデオローグや政治活動家は迫害され、思想の出版物については厳しい検閲がなされたが、文化の門戸をすべて閉ざすというわけにもいかず、結果的に文学にはわずかな自由の余地が残された。だから、当時の詩や小説には、しばしば反逆の気配と抗議の姿勢が見出せる。［Delgado 1996:111-112］＞

デルガドは数人の批評家との討論のなかで当時を振り返り、48年までは純文系雑誌が流行っていたのが、1950～55年のリマでは一変して思想系雑誌が

3　José María Eguren（1874-1942）ペルーの詩人で耽美的な作風の詩を数多く残した。
4　これはウェストファーレンやセサル・モーロ（César Moro 1906-56）など30年代にリマで活躍したシュルレアリスムの一派を指している。

乱立し、さらにその背景には、詩人や学生を中心とする「文学は何に役立つのか」という戦闘的な問題意識があったと述べている［AA.VV. 1981: 72］。また、同じ討論中でアベラルド・オケンドは、自身が主催していた雑誌にバルガス・ジョサが「詩の犠牲は有用か？[5]」と題する記事を寄せ、ロムアルドの低俗なプロパガンダ詩を痛烈に批判したことを回想している［AA.VV. 1981: 73］。正確な年代は不明だが、攻撃の対象となったロムアルドの詩集が刊行されたのは1958年であるから、バルガス・ジョサは22歳、すなわちサン・マルコス大在籍時のことと推測できる。アントニオ・コルネホ・ポラールは当時の詩人たちと学生運動との関係に触れて＜私の記憶では、オドリア独裁政権の間、社会詩は、その当時とても重要であった政治的機能を果たしていました。詩人の参加しない学生運動やデモというものはなかったと思います。詩は政治運動の一翼を担っていたのです。［AA.VV. 1981: 75］＞と述べている。そうした参加型詩人の代表であったロムアルドの文学的堕落に対して、若きバルガス・ジョサが喧嘩を売ったという顛末であろう。

このように、50年世代とは実相が見えにくい集団であるため、関わった作家たちがいったいなにを見ていたのか、個別に検討する必要がある。バルガス・ジョサのような小説家は、独裁政権に対する不満は共有しながらも、左翼系の詩人たちの安易なプロパガンダ文学には懐疑的な立場であったに違いない。いっぽうリベイロは、社会改良論的な立場そのものに無関心であったと思われる。これについては、実は大学のカラーというものが重要で、本稿でこれ以上深入りはしないが、たとえば当時の反オドリア運動の拠点はサン・マルコス大であった[6]。政治のために文学の質を犠牲にする愚行を痛烈に批判し続けているバルガス・ジョサであるが、その実、当の彼自身が現在に至るまできわめて社会改良主義的な立場を堅持していることは明白であり、それは遠くサン・マルコス大時代の精神形成にも理由があるに違いない。いっぽう（現在ではサン・マルコス大に隣接している）カトリック大出身の文人

5　未確認。オケンドによるとバルガス・ジョサの記事名は“¿Es útil el sacrificio de la poesía?”、そこで攻撃されたロムアルドの詩集は *Edición extraordinaria.*（1958）である。この詩集はロムアルドがマルクス主義詩人への事実上の“転向”を表明した作品として悪名高い。

6　これは90年代後半に至っても変わっていなかったようである。たとえば小説家のミゲル・グティエレスがサン・マルコス大の出版局からリベイロを論じる研究書を刊行しているが、彼はそのなかで、リベイロ作品がボルヘスに類似していると無茶な議論を派手に展開した後、将来的には革命前のブルジョワの堕落ぶりを描いた作品として評価され得るだろう、と、頓珍漢としか言いようのない結論を導き出している［Gutiérrez 1999: 57-60］。そもそもそんなに革命がしたいのなら小説など論じている暇はないと思うが。

は、代々リベイロのような有産階級のノンポリというのが固定的イメージで、たとえば上述した議論の中でも、詩人のマルコ・マルトス（カトリック大出身）から共産党員としての過去を問われたデルガド（同じくカトリック大出身）が言い訳がましくこう述べている下りがある。＜たしかにかなりの初期には共産党青年団で詩を書いていました。でもその後は党員をやめています。それに、私は一時期政治にまったく関心を失いました。私の最初の詩集は、前衛とはほぼ袂を分かちますが、いわゆる純粋詩に属していると思いますよ。それからサン・マルコス大の詩人たちと接触して－私は当時カトリック大生でした－、政治への関心を取り戻したのですが、それは実践的な見地からではなく、原理的というか社会的というか、こう言っていいのなら道徳的な見地からだったわけです。[AA.VV. 1982: 80]＞いかにもしどろもどろではないか。カトリック大出身の詩人としては、いくら若気の至りとは言え、共産党員としての過去など恥辱以外の何物でもないのだろうか。

多少脱線し過ぎたが、この当時のペルーのこうした文学事情を踏まえてリベイロ作品と日記を読み直したとき、自分の私生活をベースに、ミニマルな視野に現れたものを描写対象に限定していたリベイロの自閉的な文学世界が、当時、いかに異端的であったかが分かる。

リベイロの渡欧に同行していたのは、やはりこの50年世代に属する二人の詩人であった。うちの一人アルベルト・エスコバル（Alberto Escobar 1929-）は今日むしろ学者として知られた存在であり、当時から相当な勉強家だったらしく、若いリベイロの劣等感をあおっていたらしい。＜1951. nov. 17：エスコバルがいると、あらゆる意味で傷つく。[中略] いっぽうで彼の成功（ペルーで詩の賞を取ったばかり）に圧倒される。彼を羨むわけじゃない、僕には寛容だし理解のある奴だから。でも、彼の幸運は、僕の無能をはかる物差しなのだ。彼は僕より年下で、もう桂冠詩人なのだ。そして、詩人というだけでなく、おそらく僕たちの世代の批評家でもあるのだ。＞と、既にリマ時代から年下のエスコバルに対してずいぶん卑屈なリベイロは、渡欧後もなにかとこのエスコバルを師匠格として慕うこととなる。エスコバルに知性でかなわないと感じていたリベイロが社交でかなわないと感じていたのが、もう一人の詩人レオポルド・チャリアルセ（Leopoldo Chariarse 1928-）である。渡欧後、極端に内向的な性格のリベイロは、この軽薄な詩人のパリでの軟派ぶりに呆れ果て、ついに詩人が結核を患ったときには次のようなことを書いている。＜1953. sep. 7：あの病気はヨーロッパでかかったにちがいな

い。彼の生活はかなり乱れている。たしかに酒も煙草もやらないが、過剰でときにはグロテスクなまでのドン・フアン病を患っていて、道ですれ違う女にいちいち声をかけるのだ。日に百人声をかけ九十九人に断られるが、首を縦に振る女が必ず一人はいて、通算すると相当な数の女と寝ていることになる。＞このエスコバルとチャリアルセは50年代を通してリベイロのよき仲間であり続けるのだが、彼らがともに、リベイロにとって「うらやましい男」であったという事実は、リマにおける文学者集団の非対称な関係（特権的詩人階級×賤民的小説家階級）と相似しているように思われる。

リベイロの育ったやや複雑な家庭環境も見逃せない。これについては彼自身による「祖先たち」（Ancestros.）と題するエッセイに詳しい［Ribeyro 1994: 225-234］。それによるとリベイロの父方の祖先は18世紀のガリシア人移民までさかのぼる。リベイロの高祖父にあたるフアン・アントニオは19世紀法曹界の大物で、最高裁判事やサン・マルコス大の学長も務めた。リベイロの曾祖父に当たるラモンも父と同じ法曹界の大物という道をたどる。自由思想の持ち主でもあったこのラモンは19世紀ペルー文学を代表する作家リカルド・パルマ（Ricardo Palma 1839-1919）といっしょに海上で遭難したり、チリとの太平洋戦争の際には捕虜としてサンティアゴへ連行されたりと波乱万丈の人生を送ったようだ。そのラモンの息子で、リベイロの祖父に当たるフリオ・エドアルドは、リベイロ家の家風に反して工学の道を選び、ドイツへ留学してリマの水道と道路建設に貢献する。それだけならともかく、彼は、リマ市内に代々暮らしてきたスペイン系クリオージョの一族からではなく、出張先の山岳部で出会った新興成金のイタリア人移民一家の娘を妻に娶った。二人は五人の子を産むも、男子ではリベイロの父だけが生き残って他は病死したそうだ。フリオ・エドアルドはとんでもない浮気男で、結局嫁とは離婚、その後、リベイロの祖母ホセフィーナは息子（＝リベイロの父）と二人で暮らすが、その息子が男系で唯一の子孫であったために、本家からの援助は受け続けたらしい。

というわけで一人男系の子孫として残されたリベイロの父は、曽祖父のラモンから「法曹界での名誉を取り戻せ」との厳命を授かるも、元来勉強に不向きであったことから、文学者らボヘミアンの集うサークルに入り浸って父親の代までにため込んできた一家の財産を食いつぶしてしまい、ろくに仕事もせぬまま10年ほどを遊び呆けて過ごしたらしい。ここにはすでに、リベイロ本人にも受け継がれていく“新大陸で没落した19世紀以前の有産階級”の

ライフスタイルが見られる。

いっぽう、リベイロの母方の家系は、20世紀に至るまでにもう少し辛酸をなめていたようで、リベイロの祖母はカジャオで荷馬車業を営むなど苦労の人であったらしい。リベイロの母の代では、もともとの血であるバスクに加えてユダヤと先住民の血も若干混じっていたと言う。ちなみにリベイロの母は15歳でもう働いていたというから、30歳で仕事もしていなかった父に比べるならば、ごく普通の市井の労働者であったことが分かる。どちらかと言えばリベイロの短編小説に登場しそうな無産階級の“声なき人”であろう。母方の祖母は、いかにも勤勉な労働を蔑視していそうな娘の求婚者（＝リベイロの父）のことをあまりよく思っていなかったらしい。そりゃそうであろう、手塩にかけた娘に言い寄ってきたのは、華麗なる先祖の財産を一代で浪費した“ごくつぶし”なのである。とにもかくにも二人は結婚し、リマ沿岸部のマグダレーナでの暮らしが始まった。

かくして、リベイロが物心ついたときに残されていた財産というのは、屋敷等の不動産と、そこに残されていた先祖代々の蔵書、そして過去の栄光を偲ばせる写真の数々、あとは両親双方の親戚たちの財布くらいしかなかったわけである。

このような情報からは、リマが山岳部からの移民で急激に膨張する最中、先には衰亡しか見えていない一有産階級の家系の数少ない子孫として、孤独な日々を過ごしていた若き日のリベイロが見えてくる。後にリベイロは渡欧に踏み切った理由を日記で振り返っている。＜1958. ago. 9：ヨーロッパへ発ったのは、たぶん、空っぽの家を空しく歩きまわることや、部屋から部屋へと歩きまわっては家具に触れたり写真や燭台を眺めたりするだけの虚ろな朝が嫌になってのことだろう。＞また、リベイロの初期作品に現れるリマの下層階級の人々が、実は、母方の家系を通して現実に見聞きしたリマ市民でもあるということも分かる。リベイロが、いっぽうで長編小説『日曜日の妖精たち』（*Los geniecillos dominicales*. 1965）のように没落した有産階級の無為な暮らしを描きつつ、いっぽうではリマの無名の巷に生きる人々の思いを筆にしていた理由は、彼の私生活を通して説明がつくわけである。これについては、リベイロ本人が、とある記事で、両親の出自に触れて、次のように述べている。＜私はペルーの有産階級に属したいと思ったことはないし、また貧しい出自の地方家族に属したいと思ったこともない。私はそのどっちつかずの位置で満足している。そうすることで、その両方の立場を、至極自由な精

神で、客観的に観察することができるからだ。私はなんのためらいもなく有産階級の欠点を嘲笑うことができるし、同様に、母方の家系がそうであった新興中産階級の諸問題に理解を示そうとすることもある。［Tenorio Requejo 1996: 62］>

このように、純粋詩が中心の文壇にあって華々しい活躍をする詩人たちに羨望を抱きつつ、また1948年以降、一変して政治色が濃くなってゆく言論文化には参加すらせず、また、没落を待つだけの家庭にあって将来への不安しか持てない状況で、リベイロは、日記と短編の執筆を通し、徐々に自らの内面へと沈潜してゆくことになる。

4．日記集第１巻（1950年～60年）

リベイロによると14～5歳から書きはじめていた日記であるが、単行本第１巻刊行時に刊行可能であると判断したものは1950年４月11日以降（21歳以降）に限られていて、日記はこの日付から時間順に並べられている。さらにそれらが、1950年代にリベイロが移動した都市ごとに、合計９つのセクションに分かれている。10代の日記を省いたことには色々な理由があったと思うが、刊行されている彼の短編小説でもっとも若書きの作品「バッジ」（La insignia）が1952年に書かれているから、結果的には、短編小説執筆年代に合致する日記を選択していることになる[7]。

10年間にわたる日記の内容を敢えて三種類に大別するなら、①経済的困窮と将来について（＝金）、②孤独癖と恋愛について（＝対人関係）、③小説執筆と読書について（＝文学）となり、20代から30歳前後までの10年間ということもあってか、特に①と②が突出して多い。これは非常に大事なことであって、そのように金と女の話ばかりしていた50年代に書かれた短編小説こそが初期４短編集に含まれているという事実を改めて指摘しておきたいのである。この頃のリベイロは、ペルーの社会問題に頭を悩ますインテリ社会改良主義者などではなく、それどころか、明日の生活費の工面と別れた女たちへの未練で汲々としていた“ダメ人間”である。彼は、自身の小説中の名もなきリマ市民たちとほとんど同様の、惨めな挫折だらけの日々を送っていたわけである。

7　リベイロの短編の完成年度は全４巻の *Las palabras del mudo.*（『声なき者の言葉』）における作者自身の指定に従っている。

挫折は、現実のそれ以上に、まず彼自身の作り出す表象として立ち上がってくる。すなわち日記の冒頭の一文である。＜1950. abr. 11：大学の授業が再開、将来についてこれまでになく意気消沈、懐疑的になる。＞＜1950. abr. 30：最悪の日曜日。ピカピカに輝く倦怠というものを知る。＞＜1950. jun. 3：どうして今日はこんなに落ち込むのだろう？　金も成功も恋愛もなく、まるで毎日が枯れ葉のようにひらひら落ちていく。＞＜1950. ago. 1：自分は生存競争にはまったく向いていない。＞＜1950. dic. 5：自分の日記を再読する。おそらくこんなことを始めた自分自身の頭のおかしさを裏付ける文章がきっちり10ページ書かれていた。＞と、この後ろ向きの書き出しは以後10年間あまり変わっていない。

また、1950年４月30日にすでに短編小説を書く計画を練っているので、リベイロは少なくとも21歳から何らかの短編小説を書こうとしていたことになる。リマで、カトリック大法学部の授業には出ず、音楽を聴いたり小説の構想を練ったりするだけの日々を自ら＜1951. feb. 24：敗れて、何もできず＞と表現し、vencido（敗れて）という後に繰り返される過去分詞を早くも用いている。日記断筆宣言も再三繰り返されている。＜1951. may. 20：この日記を続けたくない。グレゴリオ・マラニョンの言葉は僕が予見していた現実をまざまざと見せつけた。“あらゆる日記はゆるやかな自殺である”。僕は自殺をするには気の弱い人間だ。さらに、僕の“わたし”というのは観察すればガッカリすることばかり。世界はもっと魅力的だ。そこに飛び込まなくては。＞と述べて日記をやめたのかと思いきや、その５ヶ月後に再開する。＜1951. oct. 19：一度心の中の対話に馴染んでしまうと中断するのが辛くなる。＞こういうことはその後も何度か繰り返される。

リマ時代か、あるいは1952年10月の渡欧の船旅の最中か、あるいはマドリードで書かれたと思われるのが短編「バッジ」と「日記の一ページ」（Página de un diario）と「メレンゲ」（Los merengues）である。最初の「バッジ」は第二短編集に含まれていることから“リベイロの新境地を示すカフカ・ボルヘス的作風”のような扱いを受けがちであるが[8]、執筆年代からすれば、

8　邦訳もある（「記章」井尻香代子訳：ガルシア＝マルケス他『ラテンアメリカ文学アンソロジーエバは猫の中』木村栄一他訳、サンリオ文庫、1987年、pp.108-114）。あとがきの解説にはリベイロの初期２短編集を評して＜都会に生きるさまざまな階層の人々の姿を写実的に描いた作品やカフカ、あるいはボルヘスを思わせる幻想的な短編の収められているこの二作［p.147］＞とある。「バッジ」は、リベイロの作品の中では、ペルー以外の読者にもっとも読まれているかもしれない。

これはむしろ初期の習作的な作品に過ぎず、主人公がまったく自分のあずかり知らぬ次元で機能している組織に巻き込まれていくという物語には、リベイロ自身の没落有産階級という出自が見え隠れする。むしろ重要なのは「日記の一ページ」だ。題名も示唆的である。わずか４ページの短編で、父の葬儀における一人の少年の思いを綴った地味なものである。最後、少年が、亡き父の書斎で、父の遺品に囲まれて、父と同じ気分を味わうという、リベイロの好きな感情移入の描写があるが、この短編のほとんど身辺日記と言ってもよさそうな単純な結構はいわゆる“心境小説”“私的エッセイ”というようなものに近づいており、既にリベイロ晩年の本格的な心境小説『サンタクルス物語』を先取りしているとも言えよう。

渡欧後約１年中断された日記は1953年８月３日から再開されている。パリ時代の筆致も相変わらず陰気で、特にこの時期にリベイロの引きこもり癖が亢進しているようだ。＜1953. sep. 10：僕の感覚はパリで病的なまでに鋭くなってしまった。そばに他人が五分以上いることに耐えられない。ぎらぎらした日差しを浴びると気を失いそうだ。可愛い女に会うと殴られたみたいに体が震える。まったく厄介なことになった、思わず泣きたくなる。外界と接触するたびに縮む小さな触覚で覆われた軟体動物になった気分だ。＞また同年10月11日には短編「Ｌ区画」（Interior L）がリマの雑誌に掲載されたことを知る旨の記述がある。この短編は、貧しい職人の男が未成年の娘の妊娠に接する顛末を描いているが、最後に、それが金になるならもう一度男と関係をもってはどうか？と問う父に娘が“考えてみる”と答える印象的な場面が用意されている。また同年12月２日には名作「沖」（Mar afuera）についての記述がある。リマの沖に浮かぶ小舟を舞台に、主人公の青年が眼前の無口な相棒に殺される覚悟をするまでの顛末を描いたヘミングウェイ的な作風の短編である。翌1954年３月には「蝋燭が燃えている間に」（Mientras arde la vela）を書き終えたとある。スラム街に暮らす女が夫にふと殺意を抱く瞬間をクライマックスに持ってきた短編である。第一短編集の表題作「羽のないハゲワシたち」についての記述は同年８月11日にある。リベイロは当時ホテルの守衛のアルバイトをしていた。スラムに暮らす二人の少年が豚を育てるためにゴミを拾い漁るという筋立ての短編を書いている時のことだった。リベイロの日記にはこんな記述がある。＜1954. ago. 11：ちょうど「羽のないハゲワシたち」を書いている最中に、自分がゴミバケツを運んでいるというのも奇妙な話だ。このことが僕の短編に少しでも心理的な正確さをもたらし

てくれることを期待する。＞実体験を創作に反映させるというこの姿勢は、その後も一貫して変わらない。

リベイロの初期短編には、限定された空間を舞台に、抜き差しならぬ状況に追い込まれた人物が、諦念と共に、運命に身を委ねるというパタンが多い。そういう短編を書いているリベイロ本人もまた、パリのカフェで自らのにっちもさっちも行かない状況に諦念半分で身もだえしていたというわけである。リベイロは、あくまで自分の体験を基に人物造形や物語構想を練っていたようで、このような個人的体験を創作の唯一のよりどころとする姿勢が、彼を結果的に長編小説の書けない作家にしているようだ。リベイロは長編小説を書く困難を再三強調するいっぽうで、短編執筆のプロセスについては、無垢といってもいいほど古典的な感情移入の重要性を強調している。＜1954. oct. 5：今これを書いているカフェ「プチ・クリュニー」の私の向かいに鏡がある。書いている最中、自分が怒ったり、眉間をしかめたり、寒がったりしているのを見て驚く。＞また、些細なことであるが、リベイロは執筆中に酒を飲んでいたようである。＜1954. dic. 14：短編集用の最後の作品「警察署にて」（En la comisaría）を終える。この偉業を成し遂げるのにロゼワインを半分空にせねばならなかった。＞“偉業”と呼べるほどものすごい短編であるとも思えないし、起床後には必ず6時間タイプの前に座ると豪語しているバルガス・ジョサなどの能率性に比べると、相当怠惰な作家であった言えるだろう。

日記を書く行為への嫌悪感はパリ時代にも繰り返されている。＜1954. ene. 29：内面の日記というのはどれも深い孤独感から生まれる。愛、宗教、政治、社会を前にしての孤独。日記作者の大半は独身者だ。既婚者、活発な人間、社交的な人間、公的な役割を背負っている人間というのはまず日記など書かないだろう、他人によって、そして他人のために生活をすることに忙しくて。＞＜1954. feb. 12：“ついに探していたものを見つけた”とこの日記に書けるのはいつのことになるのか？＞

また、この頃リベイロが知り合ったCという女性との関係は、その後日記の中心的話題を占めるようになっていく。リベイロがCの素性を正確に記しているわけではないが、文面から察するに同郷のペルー人で少し年上の女性である。リベイロはCとパリで8か月間同棲するが、Cは先にペルーへ帰ってしまい、その後は手紙によるいわゆる遠距離恋愛が続く。日記はその間の煩悶をネチネチと繰り返していくのである。1958年にリマに帰った後も腐れ

縁が続き、それを正当化するような軟弱な文章をくどくどと書き続けるのであるが、最終的にCはリベイロを見切ってアメリカ人と結婚してしまい、リベイロがその結婚相手にリマで出会っていちゃもんをつける、というのが日記集第１巻のハイライトなのである。本稿ではこれ以上Cのエピソードには触れないが、一読する限り、そこに浮かび上がってくるのは、一人の我儘な女に固執し続けるダメ男の姿に過ぎない。

1955年、古新聞回収業などで糊口を凌ぎながら、リベイロは苦手の長編小説（自伝的長編と表現している）に取り掛かり、１月中旬にマドリードへ移動する。

マドリード時代の日記から頻出する語が intimidad である。まずリベイロは、執筆中であったはずの長編小説について、自分にそれが書けない理由をこのように説明している。＜1955. feb. 2：僕は自分自身の体験を無視することはできない。だから僕に書けるのは、自分が中心となってその他は装飾品であるような、喚起力のある巨大な絵のようなものだ。自分を描くのは別にいやじゃないけれど、それは正しくないことに思えるし、下らないことにも思える。だから、もっと一般的な話題に挑むべきだろうが、そのためには自分の生活の枠を越えていかねばならない。それは僕にはできないことだ。＞自分が生活で体験したことに立脚してしか執筆が出来ないとするリベイロは、逆に自らが執筆可能な対象領域を、内面（intimidad）という言葉を用いて次のように把握している。＜1955. may. 10：真の内面の日記というものは、あの“内面”と命名されている、深く、しばしば不可解な領域に浸み込んで、その領域で整理され、変貌してゆくものについての証言である。この領域は、意識とも無意識とも記憶とも合致しない、内的な生の区画である。イメージ、感覚、思い出、思念、計画等が、放恣と表現への意志という二重の相の下に共存している。この領域は、もっとも内密であるが故に、同時にもっとも容易に交流が可能なのであり、その複雑さにもかかわらず、個々の構成要素は判別が可能である。この領域を特徴付けているように見える、この興味深い二律背反。光、というか感情が言葉に変化する理想的ポイント、それらと暗闇との間に絶え間ない行き来が生れている、そんな内的な生の境界的領域として、定義できるだろう。だが、これでは少し曖昧で、いったいどのような理由から、いくつかの限られた要素だけが、この領域に入ることができるのか、説明するには至っていない。少し無理に分析するならば、“内面”だけがそうした体験を、すなわち言葉のもっとも広い意味において私たちにとっ

て譲ることの出来ないものに見えるあの体験をもたらしてくれる、と結論できよう。でもその体験とは何か？　そこに問題の核心がある。>

この intimidad という語は、形容詞として日記 diario を修飾する íntimo と対応関係にあり、リベイロが「内面」を探求することを日記執筆の最大の目的にしていたことは明白である。意識とも無意識とも記憶とも異なる、と述べているように、リベイロにとってこの「内面」とは、普遍的な人間の精神の現象として語られているのではなく、あくまで文学的で個人的な創造に際しての“立ち位置”として語られていることが分かる。そここそがリベイロのすべての創作の源であり、その源を恒常的に手元に引き寄せておくための手段が日記であったというわけだ。ただ、引用箇所に<光、というか感情が言葉に変化する理想的ポイント、それらと暗闇との間の絶え間ない行き来が生れている境界的領域>とあったのを見ても分かるように、こうした内面とは決して固定的な場ではなく、常に動的な“関係の場”として捉えられている。リベイロは、トルストイが妻に見られてもいい日記と秘密の日記の二冊を書いていたことを例に出し、次のように述べている。<1955. jun. 3.：このことは、内面というテーマについて、改めて考察することをうながしている。ここで言及されている非両立性［松本注：妻に公開されていた日記とそうでない日記の］については面白い説明ができるだろう。つまり、相思相愛の関係とは、結果的に内面の破壊を意味するのである。言い換えるなら、恋人たちの間には内面の融合が生じる。そんな状況下で内面の日記を続けるのは不可能だろう。ただし、愛が消えて、つまり一旦二人の内面が切り離されたならば、その“日記執筆者”は自己と自分の秘密を取り戻す。（悪い知らせが思考を遮る。大家がドアをノックして部屋代2000ペセタを払わなければ警察へ行くと言うのだ）>最後のカッコ書きはさておき、ここには重要な事実、すなわち内面とは他者と一旦共有されるような状況下においては、文学的にじゅうぶん機能しないという皮肉な事実の指摘がなされている。そういう意味で、日記集の第１巻、すなわち1950年代を通してリベイロが例の不在の女Ｃへの片思いをしつこく書き連ねていたこと（とそれを公開したという事実）にも何らかの意味はあるのだろう。ちなみに1957年のアントワープ時代、ミミというフランス人女性と関係を持ったリベイロは日記に恋愛のことばかり書くようになる。そこでの記述から、彼はＣから求婚されて一度断ったようなのである。<1957. jul. 14：Ｃは経験豊かな女で、心の大きな女で、僕は彼女のそばにいるとまるで寝取られ男になった気分になったものだ。彼女にプロポー

ズされたときどうして断ったのだろう？　リマで何とかする、と約束はしたが、全然果たしていないし…＞第１巻の最終章、ペルー帰国後の1959年８月の日記で、Ｃの夫であるアメリカ人男性にいちゃもんをつけて、Ｃにたしなめられた、という記述がある。ここでＣとの関係は終わっているようなので、ひょっとして1960年代以降、リベイロのこうした“片思い感覚”“寝取られ男の挫折”については変化してゆくのかもしれない。

５．終わりに

前章では主として intimidad という語の扱われ方に焦点を絞って、リベイロにおける日記執筆の意義を探ってきた。おそらく、初期の短編小説との関係をじゅうぶんに論じきれたとは言いがたいだろう。しかしながら、リベイロ文学において日記が占めていた重要性については多少なりとも論証できたはずだ。こうして見てくると、リベイロの多くの短編小説は、彼が日記執筆を通して日常的に拾い上げていた言葉を他者（リマ市民）の言葉として再編集した結果として読み直せるのではなかろうか。彼の短編全集４巻は『声なき者の言葉』という題を持つが、奇妙なことに「言葉」la palabra も「声なき者」el mudo もどちらも単数形で書かれている。むろん、それを総称と解釈すれば、この題は小説中の登場人物を表していると思われるが、実際には、この el mudo とは、リベイロ自身のことを指していたのではなかろうか。リベイロがリマ市民の言葉を代弁したのではなく、結果的に彼らがリベイロの内面の声を表象したと考えて読む方が妥当なのではあるまいか。

本稿冒頭で「私小説」という語を用いたが、当然ながら、スペイン語にそのような意味に該当する文学用語は見当たらない。私生活をヒントにするという条件だけで考えるならば、たとえばバルガス・ジョサの『都会と犬ども』なども含まれてくるだろう。作者の出身学校レオンシオ・プラードを舞台にしているし、主人公アルベルトはしばしば作者自身の投影であるとみなされる。また、私的なエッセイの延長線上のテクストということであるならば、それこそボルヘスの短編などはすべてそうである（ボルヘスは金や女の話はしないが）。逆に、リベイロの短編がすべて私小説的かと言えば、案外そうではない。自分の育った町の変化を懐古的に描いた「ユーカリの木」（Los eucaliptos）や、パリで実際に交際していたソランジュという女性を実名で用いた傑作で、コルタサルも激賞の手紙を送ったとされている「向こう岸の青春」（La juventud en la otra ribera）や、ワルシャワで実際に出会った女

性との話「バルバラ」(Bárbara) などは、かなり暴露的、私小説的であると言えるが、そうとも言えない作品もけっこう多い。

にもかかわらず、筆者がリベイロを私小説的であると考えている根拠のひとつは、彼自身が日記で再三強調している“長編小説を書く困難”にある。＜1959. feb. 23：長編小説の推敲を中断する決断をほぼ下す。あのこれ見よがしの自然主義にはもううんざりだ。誰もが知っている世界とはまったく共通点を持たないような世界を構築するのに必要な新技を今こそ見つける必要に迫られている。＞リベイロは、長編小説を書くには一定の情報をあらかじめ収集整理し、それらを自らの想像の世界へ外挿的に散りばめるという技巧が要求されるが、自分はそのような能力をまったく欠いている、と何度も繰り返している。＜1955. ago. 27：本当は、僕の意図は叙事詩的作家として振舞うこと、つまり全知の視点から描くことにある。ところが、僕の創作的才能は抒情的なものだ。登場人物は自分と同じサイズに設定する必要がある。僕にとって、自分の体験の外部にある世界を整理するのは極端に難しいことなのだ。これは創造の才覚が欠如しているというわけではなく、僕の中での創造とは、想像に寄与するものであって、現実に寄与するものではないということだ。現実的（リアリズムの）長編小説を創造しようなどというのは、僕の創作方法においては矛盾なのだ。＞自分の長編小説『サン・ガブリエル録』の執筆裏話として語られているのは、全知の視点から作者自身の外部にある無数の先行情報を整理してゆくという執筆スタイルへの拒否反応である。また、意外に気付きにくいことではあるが、少なくともペルーのスペイン語文学において、リベイロの強調している内面なる領域をめぐる文学言説を一手に引き受けてきたのは、実は詩なのである。それは50年世代という詩のムーブメントに育まれたリベイロ自身がもっともよく分かっていたことであろう。逆に考えると、リベイロという作家は、詩人肌の作家だと言えるかもしれない。

私小説的という、この把握しにくい執筆スタイルの骨法というものを、リベイロを手掛かりに考えるならば、それはおそらく、限定された時代（1950年代）と空間（リマ）に生きる人間および人間社会の病理というものを、資料を駆使して大所高所から論じるのではなくて、まず書いている自分自身がその罹患者の一人であるという自覚に立って、病理を病理の内側から炙り出すということになるのではなかろうか。バルガス・ジョサのような長編向きの作家であれば、おそらく自分の体験そのものを、外的世界の資料の一環と

して整理し直してしまうに違いない。ところがリベイロにはそれができない。<1955. set. 11：ロラン・バルトが小説を“生を宿命に変えてしまう”という理由から“死の一形態”であると主張するのはもっともである。言いかえるなら、僕が自分の体験に基づいて長編小説を書くのであれば、僕は自分の体験に対して、それが理解できるような一貫性や方向性や意味を与えてやらねばならないし、結末へと導くためには一定の制限も与えてやらねばならない。そのどちらも、僕の場合は不可能だ。>そして、このような状態、すなわち自己の置かれた生に関する合理的説明の不可能性は、彼自身の小説に現れる登場人物たちのあり方にシンクロしてゆくのである。

自らを周縁的な存在として嘲笑的に記述できる作家にできる唯一最大の貢献があるとするならば、それは、そのような周縁性の自覚から、同じく社会周縁部の暗闇にひっそりと生きている人々、オクタビオ・パスに倣って言うならば、征服以来の長きにわたって、まるで永遠の思春期のような“自己と他者をめぐる関係不全の迷宮”を生きている人々の孤独というものに、精確に同調することに他ならない。おそらくそうした作用がリベイロの言う文学的“想像”のあり方なのだ。リベイロが、その死の間際、自分の作家としての振舞い方を現在完了形で振り返った時に、小説と日記が相互依存的な関係にあったことに改めて気づいたとして、何の不思議もないわけである。

６．参考文献

AA.VV., 1981, *Literatura y sociedad en el Perú*. Hueso Húmero Editores, Lima.

AA.VV., 1982, *Narración y poesía en el Perú*. Hueso Húmero Editores, Lima.

Cornejo Polar, Antonio, 1989, *La novela peruana*. Editorial Horizonte, Lima.

Delgado, Washington, 1984, *Historia de la literatura republicana*. RIKCHAY PERU, Lima.

—1996, “Julio Ramón Ribeyro en la generación de ’50” en Tenorio Requejo, Néstor (comp.), 1996, *Julio Ramón Ribeyro: el rumor de la vida*. Arteidea Editores, Lima, pp.109-119.

Elmore, Peter, 2002, *El perfil de la palabra. La obra de Julio Ramón Ribeyro*. Fondo de Cultura Económica - Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

—1993, *Los muros invisibles. Lima y la modernidad en la novela del siglo*

XX. Mozca Azul Editores, Lima.

González Vigil, Ricardo, 1996, "Ribeyro autobiográfico" en *Asedios a Julio Ramón Ribeyro*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, pp.303-306.

Gras, Dunia, 2005, "Otra cara del éxito: Julio Ramón Ribeyro y La tentación del fracaso" en López de Abiada, José Manuel／Morales Saravia, José, *Boom y Postboom desde el nuevo siglo: impacto y recepción*. Editorial Verbum, Madrid.

Gutiérrez, Miguel, 1999, *Ribeyro en dos ensayos*. Editorial San Marcos, Lima.

Higgins, James, 1991, *Cambio social y constatnes humanos. La narrativa corta de Ribeyro*. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima.

Luchting, Wolfgang A., 1988, *Estudiando a Julio Ramón Ribeyro*. Vermuert, Frankfurt.

Navascués, Javier de, 2004, *Los refugios de la memoria. Un estudio espacial sobre Julio Ramón Ribeyro*. Iberoamericana - Vervuert, Madrid.

Oviedo, José Miguel, 1998, *Historia de la literatura hispanoamericana. 4. De Borges al presente*. Alianza, Madrid.

Ribeyro, Julio Ramón,

—1973, *La palabra del mudo*. Milla Batres, Lima.

—1978, *Prosas apátridas aumentadas*. Milla Batres, Lima.

—1992, *La tentación del fracaso I. Diario personal 1950-1960*. Jaime Campodónico, Lima.

—1994, *Antología personal*. Fondo de Cultura Económica, Lima.

Sánchez, Luis Alberto, 1989, *La literatura peruana V*. (6ta ed.) EMI.S.A., Lima.

Tenorio Requejo, Néstor (comp.), 1996, *Julio Ramón Ribeyro: el rumor de la vida*. Arteidea Editores, Lima.

Toro Montalvo, César, 1996, *Historia de la literatura peruana. Tomo XII. Siglo XX. Narrativa-ensayo (1900-1995)*. A.F.A.Editores, Lima.

Valero Juan, Eva Ma., 2003, *La ciudad en la obra de Julio Ramón Ribeyro*. Universidad de Alicante, Alicante.

—, 2003-b, *Lima en la tradición literaria del Perú*. Universidad de Lleida, Lleida.

Velázquez Castro, Marcel, 2002, "Ribeyro, el cazador en el exilio" en *El revés del marfil. Nacionalidad, etnicidad, modernidad y género en la literatura peruana*. Universidad Nacional Federico Villarreal, Lima, pp.173-174.

Zorrilla, Zein, 1998, *Un miraflorino en París. Ribeyro: la tortuosa búsqueda del Craft*. Lluvia Editores, Lima.

追　記：本稿刊行予定の2010年３月末、大阪大学人間科学研究科染田秀藤教授が退職される。教授は、旧大阪外国語大学時代から、ペルー・カトリック大学と阪大との研究教育両面での交流に尽力された。幸いにもその恩恵に預かり、現在非力ながらもペルー文学研究に携わる者として、この場をお借りし、深甚なる謝意を記す。（松本　健二）